

—第2報 韓・日女子学生の民族服に対する意識の比較—

奈良女大家政 ○金 由美 奈良女大生活環境 中川早苗

【目的】今日、韓国も日本も民族服は殆ど特別な日に着る衣服になっているが、民族服に抱く意識には違いがみられるのではないかと思われる。なぜなら民族服とは、民族が長い歴史の中で育み継承してきた独自の文化であり、そこには民族の誇りやアイデンティティがシンボリックに表現されているからである。本報では、韓・日女子学生の民族服に対する意識の差異、意味や役割、また将来どうあるべきかについて比較考察することを目的とする。【方法】構成した仮説をもとに予備調査を経て調査票を作成する。主な項目は民族服の実態、民族服に対する評価やアイデンティティなどである。対象者は韓・日女子学生で有効回数票(韓国は484票、日本は557票)、1041票を実際の分析に使用した。分析はまず、単純集計やクロス集計をもとに平均値の差の検定、 χ^2 検定を行って意識の差異を検討した。次に、因子分析、クラスター分析によるタイプ分け、タイプ別のクロス集計を行った。【結果】民族服に対する関心や両国とも非常に高い。特に、韓国の女子学生は所有数や着用頻度は低いが、民族服に対するアイデンティティは非常に高い。つまり、韓国の女子学生は心のよりどころとして、日本の女子学生は特別な日に着るおしゃれな晴れ着として評価しているが、民族の誇りとしていつまでも残したいという願望は同じであることが明らかになった。これらの意識への反応パターンをもとにクラスター分析を行った結果、4タイプに分けることができ、それぞれの特徴を明らかにすることができた。